

教 仁 名 聞

第 89 号
(発行日)

2018年2月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

法に依って他に依るな

釈尊の有名なお言葉に

自らに依って 他に依るな
法に依って 他に依るな

という句があります。この場合の「自(みずか)ら」というのは、「法が今ここに事実となつてはたらいっている真実の自己」という意味でありましよう。ですから「自ら」と「法」とは別なものではありません。「他に依るな」の他とは、そういう法以外の有限なもの全てと言えましよう。

では「法」とは何かといえ、真宗では南無阿弥陀仏(アミダ仏)のことです。

では法以外の「他」とは何かといえ、いわゆる「世間のもの」であつて、その中にはもろもろの財物や社会(国)や他者や自分の身や心などなど、そういった有限で流動しつつあるすべてのものを「他」と申します。

それで「他に依るな」とは、

はありません。ただそのような話を聞かされても「自分は大丈夫」と自分だけを特別視しがちです。

こうしたものを確かな人生の依りどころとしてはいけなといわれるのです。

というのは私たちは普通、こうしたお金とか身体とかあるいは家族や親族、そして人間性とか才能とか、会社とか政府とかなどさまざま「他」を支えにして生きています。

しかし、それらは皆「無常」なものであり変転する事柄です。無常というのは常が無いということ、常に変化して止まないという意味です。たとえば、「自分は健康だから大丈夫」と思つていても、それは今の状態が健康であるだけであつて、十年先どころか一年先いや半年、いや本当は明日もわかりません。病気になる、事故に遭つたりして身体が悪くなる、ことがしばしばあります。

昨日も友人から電話があり、「ついこの前電話で話し合つていたA君が次の日に脳溢血で死んだと聞いてびっくりしている」との事でした。こういう話は決して珍しいことで

そういうわけで身体一つをとつても不安定でいづつどうなるか分かりません。しかし、こういうものよりほかに依りどころを知らずから、それを頼りにして生きて生きるを得ないのです。

ところがしばしば当てが外れて「なんでこんな目に遭うのか」と嘆くことになりまう。若さは老いに移り、昨日の友は今日の敵になりかねません。百までは生きれるだろうというのとは当てであつて殆どはその手前で「この世の時間切れ」となりましよう。

そういう当てにならないものを当てにしていると、当てが外れて嘆きに陥ります。そして、たとえ無事安穩である時でも「もしも」という不安がついてまわります。

また、自分の行いを当てにしている場合もあります。それはいわゆる真面目に生きていく人によくあるのです。どういふことかと申しますと、

「善い行いをすれば幸せになり、悪いことをすれば不幸になる」という倫理観です。それを死後まで引き延ばすと、世間でよく言われる「善いことをすれば極楽へ行く。悪いことをしておれば地獄へ落ちる」などという考えです。

これは——自分の行いの善し悪しで未来の幸不幸が決まってくる。親切をすれば正直であるという善い行いをすればいくと自ずから福もたらされる。人に冷たくしたり嘘をついたりしていると不幸になる、バチが当たる——というような考えです。これは案外人の心の根になつています。世の中ではそれで済むようですが、その心根の中にあるのは功利心(我執我愛)であります。

このような生き方は真面目なようですが、それはどこまでも自分の行いを依りどころにして自分を安定させようとしていくのですから、やはりなお「法」を依りどころにせず自分の行いという「他」を依りどころにしているのです。

一方「法に依れ」とは、南無阿弥陀仏に依れといつていのでありましよう。これは実際にどういふことかと申

お便り

K・T生

こえるままと教えて下さり、先生は「我が名を称えるばかりで助ける、他に何も要らない」と仰るのが、不思議にも、今この口に称え、耳に聞こえる南無阿弥陀仏といつも教えて下さいます。

自分には今も、何も分かりませんが、先生方が「助けるの仰せじゃ」と教えて下さるのをそのまま頂くより道が無いし、仕様が無いのであります。現実（弱肉強食、金銭至上、差別、動乱、どうにもならない、我執、煩惱具足の身と世）は何も変わりません。ただ念仏を申す。申せば耳に聞こえ、骨に響く。ただそれだけで他に何もありません。

祖師聖人の仰る専修念仏、選択本願念仏とは「唯」であります。無上正真道、念仏の大道をこの凡夫の身と無明のまま、末席ながら先生や無相さん、松並さんの後を慕って往きたく存じます。（了）

健康や家族などを「一応、当てにしながら」生きるのではないのでしょうか。十年先、一年先もまだ生きているという前提でローンを借りたり、仕事をしながら経済生活を営み、体を大事にして生きるのでしょうか。

当てにしてはいけなからといって、未来のこと、明日のことを一切考えず、今日ただ今だけに生きるといふ生き方は聖者にはできて凡夫にはできないのではないのでしょうか。

春に苗を植えるのは秋に収穫を得るためという当てもなかったします。来月先、来年先まで視野に入れて、仕事をしたり人と交わったりするのであります。

そういうことで、お金とか身体のこと配慮しながら生きるのですが、しかし仏法を聞きつつ生きるということはどうも真の依りどころは南無阿弥陀仏であり、そのお声を南無阿弥陀仏（我、汝と共にあり、汝を抱いている）と聞きながら、この世のものは当てにならず飯のものと知らされつつ、この世のことを大事にしながら生きるのが凡夫の仏教生活でありましょう。

仏のお念仏なのです。

ですから南無阿弥陀仏において「我によりかかれ」「我をたのめ、助ける、引き受ける」と仰せ下さるアミダ仏のお言葉を聞いて、「アミダ様なればこそ」と聞き受ける時、不思議にもはかりないのちであり光である永遠の実在にふれ、このアミダ仏に離れなくなるのです。アミダ仏と私はもう切っても切れない、離れない有難い関係にあることを知らされるのです。こうして南無阿弥陀仏は変転しない真の依りどころとなつて下さるのです。

世間の様々なもの、我が身、我が心、それらに依りかかっていた私が阿弥陀仏を真のよりどころとさせて頂くのです。その上でこの世を生きるのです。

ただし、南無阿弥陀仏を真の依りどころと知つても、なお様々なこの世の物や事柄を一応当てにしながら、いわゆる「当てにならないものを一応当てにしながら」生きていくというのが、凡夫における念仏生活ではないでしょうか。この世に生き、この身をもつて生きている間は、お金や

しますと、まずお念仏を申し、南無阿弥陀仏と称えてみます。そうするとナムアミダブツと耳に聞こえてきます。この南無阿弥陀仏の南無は「依りかかれ」とのアミダ仏の大悲の仰せです。だから南無阿弥陀仏は「依りかかれと仰せ下さる阿弥陀仏」であり、その喚びかけたもう声であり、言葉であります。

さて、アミダ仏とは寿命無量・光明無量のお働きであります。はかりなきいのちであり光であるお働きです。

それは万人いや一切の生きとし生けるものに働いているいのちそのものであります。この御いのちの上に私たちは生まれ、生き、死んでいくのでありますから、一切衆生の存在の土台であり、根源です。

ただこの阿弥陀仏のいのちと光を「知らない」ゆえに、苦しみ悩みの状況が自分の上に現われて来て、この妄念妄執を長々と繰り返しているのです。

こうして苦悩の世界にいる私たちに、有難いことにアミダ仏はご自身を露わに下さり、喚びかけて下さっているのです。それが南無阿弥陀



十方三世の無量慧

(和讃問答)

十方三世の無量慧

おなじく一如に乗じてぞ

二智円満道平等

摂化随縁不思議なり

(浄土和讃)

(現代語訳) あらゆる諸仏は同一に真如の理によつてさとりを開き、権・実の二智を円満し、菩提の仏果は平等であつて、しかも衆生を救うためには、機縁に随い、差別があつて、測り知られない(名畑応順訳)

D 「このご和讃は諸仏のお徳を讃歎された内容です」

N 「十方三世とは」

D 「十方は、東・西・南・北・南東・北東・南西・北西・上・下の十方で、あらゆる方角のあらゆる場所が十方世界でこれは空間的、そして三世とは、過去世(前世)・未来世(来世)・現在世の三世でこれは時間的で、時間空間の全体を十方三世と申します」

N 「無量慧とは」

D 「量り無き覚りの智慧を完成したお方のことで、仏のことです。十方三世の無量慧とは、十方三世にまします仏たちのことです」

N 「仏とは死んだ人という意味ではないのですね」

D 「ええ、覚りを完成したお方のことです」

N 「では仏と菩薩とはどう違いますか」

D 「仏に対して菩薩とは覚りの完成に向かつて歩んでいられるお方のことです。菩薩ですから、覚りを未だ開いていないお方、あるいは覚りがある程度開いてもその覚りがまだ完全では無く仏への途上のお方、それらを含めて菩薩といえます。弥勒菩薩は仏になる一段手前の菩薩です。またすでに仏になられたお方が衆生救済のために菩薩の地位に下られる菩薩もあります。法蔵菩薩や観音菩薩などです。このように、菩薩の意味は多義的です」

N 「おなじく一如に乗じてぞ、とは」

D 「一如とは仏の覚られた真実・真理のことです。その真理は自他一如・生死一如と表されることが多いです。いわゆる、自分と自分以外(他)の一切が一体であるのを自他一如といい、それを完全に覚つたのが仏ということですから、いわば宇宙全体を自己と見るような智慧のお方ですね。また生死一如とは、生死(生滅)は一つの事実の裏表という真理のことです。私たちは生と死を別々に捉えて、生を愛し死を憎んでいます、これが迷いというものです。覚りの智慧とは、生と死は平等なる一現象と覚りきつて、愛憎の煩惱がなくなつて、生と死を平等に見ている智慧です。かような一如の真実は真実アリノママの世界ですから真如とも云います。この真実アリノママをその通りに覚知することが覚りと云われています。仏はその覚りを完成されたお方です」

N 「乗じて、とは」

D 「一如の真理を悟り真理に順じて働いて下さることではないでしょうか」

N 「二智円満道平等とは」

D 「二智とは実智・権智といつて、実智とは一如の真理を

実の如く悟つた智慧そのものこと、権智とは、自他一如の智慧は一切の衆生を自己の如くに覚知して、衆生の苦しみや悲しみに共感し、苦しみや嘆きから解放して同じ仏にしてやりたいと働きだし、衆生を救済しようとさまざまな手だてで働いて下さる智慧のことです。諸仏はこの二智の道(覚り)を平等にしかも十全に得ているので二智円満道平等といわれるのです」

N 「摂化随縁不思議なり、とは」

D 「衆生を教化して仏道に入られて下さることを摂化といい、その活動はそれぞれの衆生の状況(縁)に随つてなされるのを随縁と申します。(不思議なり)とは、そういう諸仏のお働きは、不可思議で、到底私たちの思ひの及ばない有難く尊いお働きである、と讃えられるのです」

N 「ところで話は変わりますが、時々耳にするのですが、A師やB師のような大先生であり名師であるお方が、戦時中の国家主義に同調されるような発言をされたり、時には差別的な発言もされた」と聞かれますが、どうしてそのよ

うなことが起こるのですか」

D 「そうした行為が、実際はどういう事情であつたかは分かりませんが、しかしたとえそうであっても、別に不思議ではありません。いかに信心を得た大学者でも、煩惱が浄化されたような菩薩でもありません。ですから先ほどの二智が円満しているという事柄は無いでしょう。ただ信心を得ておられるという点では仏の智慧を頂いておられるのでしようから、信心の智慧は覚りの智慧に連なりましよう。しかし、その智慧がこの世でその徳を表すのは、身をもつているかぎり一部であつて全現しないでしょう。しないという事は煩惱や偏見・邪見が起り得るといふことです。信心の行者といつても煩惱具足の凡夫であることは変わりませんから、偏見や認識まちがいはあり得るのです」

N 「そうですか」

D 「ですから、たとえ覚りの智慧を得た菩薩でも、菩薩道というものは仏道を完成するために、仏法の学びだけでは無く、様々な学問を修め、様々な経験を積み重ねていく道であるとも説かれています。いわゆる論理学、医学、天文学、

自然科学から、経済学や政治学なども修めなければならぬと、いわれています。たとえば、この世界の政治的な状況判断にしても政治・経済学という学問だけで無く、現地でのフィールドワークなども積み重ねれば正確な判断はできず、戦前のように報道が完全に規制され一方的な報道の中で、戦地の実際状況を日本の書齋の中だけで判断することは難しいことであろうと思います。ですから判断に偏りや誤りがあり得るでしょう。又その人の気質や幼い頃から受けてきた教育の影響、また厳しい弾圧の影響も当然あります。ですから正確で正しい判断をすることは容易なことではありません」

N 「そうすると、たとえ名師とか高僧といわれるお方でも自己の判断に於ては錯誤はあり得るのですね」

D 「ええそれは十分にありえます。ですからすこしは仏法が身についても、自分の判断は誤りやすいことはよく自分に自覚しておかねばなりません。親鸞聖人さえ「自分も偏った見方をしかねない」と、おっしゃっています」

N 「秀れた知識人や高僧でも

そうですから、私たち一般庶民の判断は誤りやすいですね」

D 「そうなんです。ことに日々読んでいる新聞やテレビなどのマスコミの影響をもの受けます。ですから聞法して何が真実であるかをよく聞かせていただきつつ、外から入ってくる情報にも偏らない正しい判断がなされるように学び続けていく、それ全体が聞法生活なのです」

信心夜話

(了)

信心を智慧といい。智慧とは「事実を知る」智慧であると云うような話を聞く。そして以下のように説かれる。

信心とは「思い」ではない。信心は、思いを越えた事実を知る、事実立つ、事実にならず、事実がつか、などと言われる。「生かされている身の事実が気がつく」こと、これが信心だと。

また、思いは自力であり、事実は他力であるとも言われる。そして、私たちは思いを心に生きていて、私たちの思いの、都合のよくなることを幸せと思ひ、都合の悪くなる

ことを不幸と思っている。思い通りにならないような今この事実―因縁の事実とかあるいはいのちの事実とか―を引き受けることが信心である。

あるいは、何時でも思いに先だつて今ここに生きている事実そのもの、その事実に戻る、あるいは立つこと、それが信心であるとも言われる。

以上のように、思いに先だつている身の事実を引き受けるのか帰るとか知ることが救いであると、大谷派の法話ではよく話される。

たしかに宗教理論としては成り立つのであるが、ここでいう「気がつく」「うなづく」「帰る」「引き受ける」という、こうした言葉は簡単であるが、それが自我である私から可能なかどうか。自我なる私の知（知る能力）でそのような事実が目覚める、うなづく、引き受ける、というようなことができるのかどうか。

むしろ自我の知とその事実の間には、鉄壁があるのではない。この鉄壁にぶつかるとはなからうか。それが聖人の「いずれの行も及びがたき身」と言われたお言葉ではないか。古来真剣に救いを求

めた者がこの鉄壁にぶつかり血の涙を流したのではなかつたか。ここにおいて自我の知が絶対的否定にあうのである。「出離の縁あることなき身」「唯除五逆誹謗正法の私」「助からぬ身」にぶつかるのではなからうか。足元の事実は自我からは十億億土の彼方に去るのである。

自我の知はすべてを対象化して捉えようとする知である。如来といい、いのちといい、事実といつても、私（自我）の知は対象化してしまうのである。ところが事実は対象化できない。むしろ対象化している主体のところこそ事実はあるのである。この矛盾を自我からは超えることが不可能なのである。

なぜ阿弥陀仏が、五劫思惟し、永劫修行をされ、念仏往生の願を建て、本願成就して名号となり、これを諸仏を通して衆生に聞かせ、さらに衆生の念仏にまでなつて聞かせ下さるのか。

それはそういう事実に向いて下さつている大慈大悲の光明そのものが、衆生の力（自我の知）では到底真実なる事実にあうことは不可能と知りたまいて、おん自ら形を現し御名を示して、私に喚びかけ

続けて下さる。この本願力の御名が事実なるアミダの現行であり大悲の塊であつて、その大悲がお念仏を通して私に届いて下さる。それを信心と云うのである。この信心によつてはからずも言うところの「事実」を知るのである。それを信心の智慧という。

だから、事実を知れとか事実に帰れとか事実に立てなどという話で終わるなら、それは十九願の話である。

これがどうにもならなくなつて「念仏一つ」になるのが二十願。称えているお念仏がそのままお助けの仰せと聞こえのが十八願であるが、それは如来の大悲心の働きによつてはじめて仰せが聞こえるようになるのであつて私の知性によつてでは無い。(了)

〈遠方法話予定〉

- 三月三日。福井別院。2組門徒研修会。
- 三月七日。名古屋。高畑聞法会館。十時より十二時半。法話・座談。
- 三月十日。石川県小松市。興宗寺婦人会。一時半始。
- 三月十七日。姫路市。西源寺。一時始。
- 五月九日。名古屋。高畑聞法会館。十時より十二時半。法話・座談。
- 六月十三日〜十五日。福井別院（宿泊可）。連夜より連夜。